



台徳公

長刀録

一、延喜式曰、造大刀一口、用鐵十斤五兩、長二尺四寸、此時未有三尺刀也。

一、名物標曰、伊七河濃津城主富田知信義、弘刀を佩ぶ、希古之を獲、富田郷富田郷と號す、後前田利長、賜ふ、利長之を代秀忠台徳公に獻す、

台徳公又之を利光に賜ふ、初め其刀頗長し、利長截つて之を短くす、長サ二尺一寸四分、行光ノ師父

一、三尺一寸、武家間談曰、上杉輝虎、行光の刀を佩ぶ、長サ三尺一寸、赤豆粥と號す、越後三寶刀の一なりなり、川

中島の役、以此刀、武田晴信を撃つと云ふ、又常山



茶礎破
三尺三寸
長光
上
は
月
直
改

紀後、曰是日敵兵向井與尤門後より之を搥
く、槍を以て、戦袍を穿つ、輝虎回顧一撃し
て去る、其後晴信の使者、謂て曰く甲斐より
向井某なる者有りや否やと、使者曰く、面より刀痕
有る者、即ち是なりと、輝虎曰く、吾死せりとお入り
と乃戦袍を以て向井に贈る

一、三尺三寸 太平記曰く長崎新左衛門尉為基（北条
高時の臣）京師の剣工末太郎國行をして刀を造
らし、正極鍊一百日して成る、長サ三尺三寸、精
光溢發、為基を賞するに錢十萬を以てす、名け

茶礎破
三尺三寸
長光
上
は
月
直
改

て面影と云ふ

瀧東兵亂記曰く其後、是利義明面影國行
の刀を佩ぶ疑ふは為基の刀なり

一、三尺五寸 蛸岩集及武徳編年集曰く、梁田鬼
九郎徳利家康の事して、勇を以て、聞ゆ家康出
羽月山の刀有り、長三尺五寸、鬼九郎、井伊直政、
因て之を請ふ家康、乃ち之を與ふ

一、三尺七寸 蒲生軍記曰く、或人蒲生氏郷、辯慶
の刀を獻す、長サ三尺七寸、氏郷曰く、誰か能く此の
刀を運らす者ぞと、外池甚五右衛門を召んで曰

卿試み此の刀を舞はせ、外池之を執り、縦横
揮作乃ち之を賜ふ

一、三尺九寸 幅四寸

及實我物語
源平盛衰記曰く畠山重忠備

前平の一高平の刀を佩ぶ、秩父高平と號す、

刃廣四寸、長三尺九寸、宇治河の戰敵將長瀬

兼員、提刀來り進む重忠、秩父高平を捉て

邀撃つ兼員、駭き懼して逃る

一、四尺 南郭集曰く、山中幸盛、刀長四尺、來國行

の作るところ

一、四尺三寸 名和長年、刀伯耆卷

畑時能、篠塚伊賀守、木寺相模、野木

賴玄、刀以上太平記

一、四尺六寸

和正朝、河部忠實、刀

一、四尺八寸

藤原康長、刀

和義註
賊後村

帝馬に跨り、圍を潰
了、賊一宮者種急、之を追ふ、康長此の刀を挺て

之を擊倒す

古今事紀曰く、江上家種、刀四尺八寸

一、五尺二寸

頓宮父子、太平記

一、五尺三寸

元弘中、丹波の人佐治孫五郎、五尺三

寸の刀を佩ぶ あせ未取

栗生顯友、妻鹿孫之郎長宗、五尺三寸の刀

四戰紀聞曰く真柄十郎九三直隆の刀五

尺三寸 (越前國安曇郡高野子) 千代鶴の作るところ

一、五尺三寸

大高重高、南部少郎、土岐忠五郎

一、五尺七寸

赤松氏範

一、五尺八寸

北條五代記曰く三浦義國(上杉高敏子) 平宗の刀を傳へ長五尺一寸、北條氏茂来り圍む

及び城將臨す子義次郎義喜(モト) 刀を提
けし慶應戦向ふ所摧陥遂に自刎して死す

一、六尺三寸

福津小次郎の刀 當時海内第一と
稱せらる 笛吹嶺の戦小次郎尊氏を狙撃す

せんと欲し首級を刀鋒に掲げ敵陣に入り

紹いて曰く我新田氏の族を獲らんと敵之

を斃そ (長刀を以て斃らる) 圍み撃つ小次郎

乃ち刀を揮つる慶應討臈断鎧遂に陣

を突いて還る

安田彈正は六尺三寸の刀を佩ぶ

六七尺三寸 太平記に曰く因幡人福間三郎の刀
七尺三寸蓋古今第一の長刀也

富樫記に曰く富樫政親の刀 九尺三寸

但信忠の刀 九尺三寸

大關記に曰く織田信長歩兵をして三尺餘りの

刀を持し其柄の長さ四尺之を前隊は其の

以て衝突し便なかりし之を長巻の刀といふ

北條五代記を見よに関東も亦長柄の

刀有り

一 繼述録に曰く 朝鮮の役我兵皆長刀を荷ふ

日光下射閃々として電の如し朝鮮望見駭

怖、碧蹄館の戦明兵惟短剣鈍刀を以て

のを持す我刀皆三四尺精利比無水縦横

揮擧人馬皆靡り明兵大に敗る將士氣

を褫ける

刀名録

一、草薙剣、天叢雲剣

一、天羽斬、十握剣

一、大葉川、味耜高彥根神

一、部靈

一、頭槌

一、川上部、裸伴

一、朝日丸

西行物語

鳥羽上皇之御義法之賜小と云

一、骨食

銘國古

五寸五分

我々常業

猪早太

鶴を刺さし刀

一獅子王 備前助平作 享徳三年より 勘定改め 賜

薄緑(新造無世に増より贈る)

一髪切(鬼丸 以上 鎌倉(後北条) 満仲(北前)三信(郡)の剣工より)

此物唐土降る文身也
建久中曾我時宗に贈るなり是より 薄緑を

贈る
此物唐土降る髪切を信し

一馬 力打天國の心 (平治盛衰記)

一坂丸 平治(後北条) 大石某守の心 (平治物語)

一微塵 信義仲ノ護尸子と云ふ心也

中ノ奉りし心也有り是之を曾我時宗に贈る (曾我物語)

一石切 源義平の尸 (平治物語)

一鶴丸 名何事乎此丸死す幸し 鶴を放つて

急を癒す心也 鶴一叙を以てし 即 鶴丸と云ふ 蓋し 此物某の心

此物何事乎此丸死す幸し 鶴を放つて (保元物語)

一 泥丸 ドモ 如の泥丸ノ戸

一 修作 是の義満ノ戸 (明徳記)

一 葉研徹 同上

一 實休 長船光忠作 威田信長光忠の戸

をぬふ二十五日蓋ふを一実休と稱す

長三尺一寸五分の佩ノ戸

一 燭甚 伊達政宗光忠の戸を以て人を

よむを佩をて 鉄燭架を削つは信長威

光のるを佩は燭甚と稱す

一 宇徳美 長光の心 宇徳美宗光の戸

一 大般若 長光心 本是利成の重器

長孫の役家成之を若平信昌の物

一 鉈切 長光 一尺九寸五分 長光心

信長を母長光の物

或人之を佩して 伊吹山を經 一匠候

行くに遇ふ匠候を專に 異形をぬふ

或人之を斬る匠切く 鉈を以てする 鉈

地ノ隙が匠思然見之を因名く

一 水田 長光刀 喜元宗茂ノ戸

一 茶礎破 長光心 三尺一寸五分

一腰帶

肥滿長光信實刀有り、腰帶

とてそす帯を御々人々斬る断る而僵
（平山記）

一香函

長光心

細川政之丞名女某佩りし

一面鏡

素國り 三つ

長光の女をさす

一新身

素國り 山中孝之丞

一不動國り

不動像 一にあり

松平久保の 不動光像 不動光像

三つ